帰宅願望軽減に向けた取り組み

おおざと信和苑３階入所
協力者　３階担当職員

〔はじめに〕

現在３Ｆフロアーでは、認知グループ・支援グループの２グループに分けてケアを行っている。しかし、常に見守り職員を配置して事故防止に努めたり、問題行動や、一対一対応のケアを必要とする方が多い認知グループのケアに、重点を置かないといけない現状がある。

今回３Ｆフロアーでは、周りにも影響する不穏、帰宅願望を問題視し、帰宅願望の特に強いＴ・Ｚさんを通して帰宅願望者の不穏軽減と、入苑者の方々が穏やかに苑内生活を過ごしてもらえるよう、問題解決へ向け取り組みを行った。取り組みと共に、そこから見えた私達介助者のケアの問題点や、今後のケア方法にとって、大切な事を得ることが出来たので報告する。

〔事例〕

氏名：　Ｔ・Ｚ　様　　８７歳　　女性
　　　　介護度１

病名：　老年性認知症

性格：　穏やか・世話好き・時々が頑固な面あり

歩行状況：Ｔ字杖使用。立ち上がり時、歩行時にフラツキあり。
　１対１対応。転倒注意。

〔方法〕

①チェック表作成

②チームで定期的にミーティングを開催

〔経過〕

①　１週目
・Ｔ・Ｚさんの１日の様子を細かく観察・記録

②　２週目
・遠監視にての対応開始
・タイムスケジュールに沿ったケアの実施
・家族の協力

③　３週目・４週目
・日中の活動の拠点を認知グループから支援グループへ変更
・入浴の時間を午後へ統一

④　５週目
・帰宅願望に対する有効な声かけを職員間で統一

〔結果〕

①　チェックを作成し細かく記入する事により、不穏の内容、不穏が多く出てくる時間帯を知る事ができた。

②　定期的なミーティングの開催や、申し送り帳を活用する事で、ケアの見直しや、統一したケアを行う事ができた。

③　遠監視にする事により、過剰な接し方が無くなり、表情が穏やかになってきた。

④　タイムスケジュールを決め、レク・学習療法・作業を促した結果、１日の生活にめりはりができ、作業中などは不穏が見られなかった。

⑤ 活動の拠点を支援グループに移した事により、他入苑者の不穏に影響される事が無くなった。笑顔が多く見られ、本来の穏やかな性格が多く見られるようになった。

⑥ 帰宅願望が出たときの有効的な声かけを統一する事により、納得し帰宅願望が治まる事が多くなった。

⑦ 帰宅願望は軽減したが、強い帰宅願望には、何をしても不穏状態が治まらない事があった。

〔考察・まとめ〕

① 事故防止を１番に考えたケアを行っていた結果、ケアが過剰になり、帰宅願望などを増強させていた。

② 入苑者の状態をきちんと把握し、問題解決の為に個々に合ったケアプランを決め、統一したケアなどを行い、適時モニタリングを行っていく事が大切。

③ 統一したケアを行った結果、統一ケアの大切さを改めて実感した。